



展望所から見た波浮港の景色。港近くは土地が限られていて、丘の上に人家が広がる。

波浮を訪ねて——魅力を磨き上げる皆さん

「東京都伊豆大島」

本誌編集部

「アツい」と話題の波浮港へ

東京から最も近い島といわれる伊豆大島。定期船が発着する島西部の元町港、北部の岡田港^{おかた}の両港から車で三〇分ほどの島南部に、波浮港^{はぶ}地区がある。

切り立つ崖に囲まれた波浮港は、風待ちの港として、多くの漁船が寄港して栄えた歴史をもつ。かつては、東京から利島・新島・式根島を経て神津島を結ぶ船が波浮に寄港する航路もあったが、欠航することもあり、『しま』創刊号（昭和二八年）の記事「島へ渡るには伊豆七島の巻」にも「ほとんど不定期便で、月四、五回くらいしか就航しません」との記述がみられる。

町並みにノスタルジックな雰囲気が残る波浮港。港から石段の坂を登ると、丘の上に人家が立ち並ぶ。現在、波浮

の人口は約五七〇人。人口が減り、空き家が増加している一方で、ゲストハウスやカフェの開業など新しい動きも盛んだという。「いま波浮がアツい」と聞き、現地を訪ねた。



ゲストハウスの開業と

酒屋の継業——吉本浩二さん

自ら仕事を創ったUターナー

波浮出身の吉本浩二さんが大島にUターンのしたのは二〇一三年。それ以前は、東京本土でファッションデザイナーの仕事をしていた。Uターンの当初は島の玄関口である元町で、宿泊施設経営などを行っていたが、移住六年目の二〇一九年三月に地元の波浮にゲスト



吉本浩二さん。

ハウス「青とサイダー」を開業した。

このゲストハウスは、もともと駄菓子屋だった建物をリノベーションしたもの。吉本さんは「幼少期から馴染みのある店が、たまたま空き家として売りに出されていた」と話す。二面が道路に面した宿には、「街に灯りがもれるように」という吉本さんの意図が込められている。実際に窓からもれる灯りは街路を照らし、地域全体も明るくしているようだ。

じつは、吉本さんはゲストハウスに隣接する「高林商店」の店主でもある。商店は明治時代から続く酒屋だったが、

二〇一九年の九月に伊豆諸島を襲った台風一五号の暴風によって、店の屋根や外壁が大き

く破損してしまった。この時、酒屋の先代オーナーから、建物と事業を引き継いで欲しいと依頼され、クラウドファンディングで資金を調達し、仲間とともに改修作業を進めて、翌二〇年九月に「高林商店」としてリニューアルオープンさせた。吉本さんは、酒屋の創業者から数えて五代目店主となる。

筆者が訪問した時に店番をしていたのは、元町に住む橋本佐助さんだった。建物の改修作業を手伝った縁もあって、商店で週四日働いている。現在、吉本さんや橋本さんを含む六人で店を切り盛りしているという。

店内には日用品や食料品のほか、酒屋の名残で多数の酒が並ぶ。伊豆大島の本格焼酎「御神火^{ごじんか}」はもちろんのこと、島では珍しく全国各地の酒が揃っている。ラインナップには、新潟県佐渡島の日本酒もあった。吉本さんは、「台風からの復興で活用したクラウドファンディングでは、日本海・佐渡の

方からの支援もありました。大島で苦しんでいるときに、別の島の方が助けてくれる、そんなつながりもできました。コロナが落ち着いたら往来したいです」と、佐渡との縁や各地からの支援に対する感謝の言葉を口にした。

宿泊業が増えることで地域に活気を

高林商店には小上がりがあり、訪れた人が雑誌などで情報を収集したり、一息つくことができる。カフェスペースも併設されており、将来的に、金曜



高林商店の外観。2019年の台風で大きな被害を受けた建物を改修し、翌20年にオープン。

日と土曜日の夜には店で購入した商品を楽しむことができる「角打ちスペース」としての活用も計画しているという。

近年、波浮港では住民らによるゲストハウスの開業が相次ぎ、現在は五軒が営業している。しかし、宿泊施設は増えているが、歩いて動ける範囲で夕食をとれる場所は限られており、宿泊客は食材を買い込んで自分で調理するか、飲食店のテイクアウトを利用するのが主となっている。吉本さん自身のゲストハウスも食事なしで運営しているが、「周りに飲食店がなく不便がないことはないが、むしろ私たちのような宿泊施設が増えることで、地域に飲食店が開業できる環境になっていけばいい」と前向きに語る。

影響を受けた先輩移住者の取り組み

吉本さんの活動の原動力には、島外からの移住者の存在があった。そのう

ちのひとりが、高林商店の目と鼻の先で「島京梵天」を経営する河村智之さんである。山口県出身の河村さんは、六年前に大島に移住。島で珍しい「たい焼きカフェ」で人気を博しているほか、築一三〇年の古民家を改装した一棟貸しの宿も運営している。波浮の移住者のパイオニア的存在で、吉本さんにゲストハウスの開業を勧めてくれたのも彼だという。

商店とゲストハウスの経営を手掛ける多忙な吉本さんだが、じつは平日の日中は元町で接客販売の仕事もしている。「宿や商店だけで生計を立てるのは難しかったため、日中は別の仕事をしていました。ようやく波浮での仕事が生計の中心となってきました。この春からは、仕事の軸足をそちら（波浮）に移そうと考えています」と笑う。

さらに別の宿泊施設の運営も検討しているという吉本さん。これからの動きにも注目したい。

古民家カフェを営む旅ジャーナリスト——寺田直子さん

波浮に魅せられて移住を決意

「近くて非日常。本当にここは東京か！」

波浮港のバス停近く、趣のある通りの入口に寺田直子さんが古民家カフェ「Haw Cafe」をオープンさせたのは、二〇二一年二月のこと。約三五年間にもわたり、トラベルジャーナリストとして国内外各地を訪れ、書籍やウェブメ



寺田直子さん。



「Hav Cafe」の店内で販売している大島在住者のハンドメイドの品々。

ディアなどへの寄稿を行なってきた経験を持つ彼女の目に、伊豆大島、とりわけ波浮はとても魅力的な場所に映ったという。

都心を拠点に仕事をしていた寺田さんは、知人の紹介もあり、二〇一八年から東京（本土）と大島のデュアルライフ（二拠点生活）を開始した。大島での拠点は、島内の空き家・求人・事業継承情報を発信、マッチングするサービスを展開する「シマラボ」で見つけた。翌一九年、大島に本格的に拠点を移

すことを検討しはじめたところ、二〇年にコロナの影響で海外へ出かける仕事が増減。このタイミングで本格的に波浮での生活をスタートさせるべく、古民家を取得した。

地域に仕事を任せ、信頼を得る

古民家の改修、カフェの開業にあたっては、建築家に設計を依頼し、実際の改修工事は地元の大工にお願いした。しっかりと対価を払ってプロに仕事を任せることで、本気で事業に取り組む姿勢を見せたという。寺田さんは、「生半可に取り組むことはできない。なにより、島の方の理解を得られない」とその理由を説明する。

その後、寺田さんは古物商の許可も取得し、カフェの中で世界各地を巡って集めた品々の販売もはじめた。また、例えば地域の方がハンドメイドした小物など、島にすでにあるものにスポットライトを当て、値札をつけて販売し

ている。従来は、売り場所がなかった地元の品々も、寺田さんのような島外からの視点が入ることで、波浮ならではの魅力的な商品として評価され、流通し、地域経済の活発化につながっている。

テレビドラマの舞台に

寺田さんが「Hav Cafe」をオープンしてまだ一年ほど。しかし、この間に波浮地区では大きな出来事があった。じつは、このカフェが、テレビ東京のドラマ「東京放置食堂」（主演：片桐はいり）のロケ地となったのだ。

撮影の下見で波浮を訪れたスタッフと寺田さんとの出会いは二〇二一年夏。そこからロケハン、店を締め切ったの撮影と話が進展、同年秋の放送に至ったという。もしカフェが誰も手を入れていないただの建物だったら、ドラマで使われることもなかっただろう。寺田さんが本気で古民家を改修し、街の



波浮港の通り。左手前が「Hav Cafe」。バス停近くに位置し、バスを待つ観光客や住民が立ち寄ることも多いという。

景色を変えたからこそ、ロケの誘致につながったのだ。カフェの裏には、かつての漁港施設の貯水所がある。古い建物のため、一般の立ち入りはできないが、この施設もドラマの中では印象

的なシーンとして登場している。

寺田さんは「波浮は守っていきたい場所」だと話す。波浮港の通りの入り口に建つカフェ。誰にも使われていなかった古民家は、寺田さんによって店として活用させたことで、地元の皆さんも観光客も立ち寄れる場所として継承されていく。

「意識を持つて、選択して行動していかないと、島の魅力は衰退していく」危機意識を持ちつつ、自らが率先して行動していく寺田さんの姿は、地域や島の魅力づくりに大きな影響を与えていることだろう。



リピーターが変化を感じられる島

東京からの好アクセスを生かして、島を訪れるリピーターも獲得しやすい大島。観光客が繰り返し島を訪れる理由——小さな変化を、これからも生み続けてほしい。

吉本さんは「今の時代、〇〇会などとグループづくりをあえてしなくても、SNSなどを通じて島内外の情報は入ってくる。ゲストハウスと一括りに言っても、それぞれにコンセプトがある。ほかの人とまったく同じことをするのはなく、パイオニアから刺激を受けながらも、少し「ずらした」ことをやっていきたい。それが個性になり、強みになると思う」と、ネットワーキ化が叫ばれる現代にあって自分がどうありたいかを語る。

個人で情報を発信することができ、また得ることもできる時代。自らの意志で、面白い動きをする人々の情報を得たり、交流することは難しくなくなっている。大島のみならず、全国の島々で、さまざまな事例を参考にしたい、個性ある取り組みが生まれていくことに期待したい。

(文・佐伯／写真・小原佐和子)